

機関番号：16401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720124

研究課題名（和文）無線インターネットを利用したネイティブ教授者参加型チーム  
ティーチング授業の研究研究課題名（英文）A Study of Team-teaching a Participatory Japanese Language Class with  
Native Japanese Teacher through the Internet

研究代表者

大塚 薫 (OTSUKA KAORU)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：30372733

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語学習者に対する教育において、授業の効率化を目的に多様な遠隔授業を試み、その長所、短所及び特性の把握、分析を通して教育現場での直接的な応用を研究したものである。様々な形態の授業の中で遠隔チームティーチング授業においては、対面授業を行う日本語ノンネイティブ教授者がインターネットで画像接続した日本語ネイティブ教授者を主導して学習者との仲介を行い、授業を進行していく形式が効果的であることが導き出された。このような形式で授業を実施することにより、学習者の興味の誘発及び集中度の高まり等の特徴が見られた。今後、日本語ネイティブ教授者参加型遠隔チームティーチング授業はネイティブ教授者の確保が困難な遠隔地において、多様な活用が可能だと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This is a research of team-teaching a Japanese language study class in Korea, taught by a local Korean teacher (Japanese non-native) in the classroom with a native Japanese language teacher in Japan participating through the Internet. We have had successful results in lessons run in Korea, where the local non-native Japanese language teacher in the classroom acted as a intermediary between the students and the native Japanese language teacher who participated the class through a webcam. We found this style of teaching method effective in eliciting students' interests and raising their concentration level. We believe that this teaching method has great potential for various applications at the Japanese language study in foreign countries where aren't native Japanese teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	720,000	4,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：双方向型授業、チームティーチング、無線インターネット、日本語ネイティブ教授者、参加型授業、遠隔教育、遠隔授業、対面授業

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、従来行われていた単方向型の遠隔教育ではなく、SNS 上の最新の技術を応用した双方向型のコミュニケーション機能を取り入れた作文教育等が行われるところに重点を置いている。また、SNS を活用していくことによって、授業を行っている教師と受講している全ての学習者間で情報が共有されるとともに、添削情報を収集しデータベース化することも可能になる。

さらに、遠隔教育において SNS を活用することで、個人のパソコンを利用して容易に韓国人教授者と日本人ネイティブ教授者によるチームティーチングを行うことが可能となる。

チームティーチングにおいては、大塚(2002)によると、「放送大学等の遠隔教育を主に行う高等教育機関では日本語非母語話者教授者が文法事項や日本文化の説明等を韓国語で行い、日本語母語話者教授者が発音や会話練習等を日本語で行うという方式が取られている。これは、初級レベルから上級レベルに至るまで同様の傾向を示しており、日本語非母語話者教授者は韓国語の説明を要する理論的な科目を担当し、日本語母語話者教授者は会話や作文等の実用的な科目を担当するという役割分担がなされている。チームティーチングにおいては、このような役割を認識した上で両者が定期的に話し合いの場を持つよう努力するとともに積極的な協力体制作りが必要となる。」とあるが、距離的空間を越えて両者の役割分担がなされ、より効率的な授業の構築が図られる。

また、大塚・若月が(2001)では、「韓国での初級学習者に対しては媒介語の活用が学習事項の習得、学習者の精神的な安定、時間節約等において多大な影響がある」とあるが、チームティーチングにおける授業時に使われる媒介語に関しても調査対象となる。

本研究は、従来の遠隔教育と比較して以下の点で利点があると考えられる。

### (1) チームティーチングによる授業の効率化

韓国人教授者と日本人ネイティブ教授者が合同で役割分担をしながら講義を行うことにより、学習者の学習能力を向上させるような授業形態を構築することができる。

### (2) 双方向型コミュニケーション授業による学習者の作文技術の定着化

SNS 上で双方向型作文教育を行うことによって、日本語学習者は授業における不明な箇所をリアルタイムで質疑応答により確認したり、画像音声チャット機能を利用し討論をしたりすることが可能になり作文教育で不足しがちなコミュニケーション能力を養

うことができる。

### (3) データベース構築の簡略化

日本語学習者による日本語作文とその添削情報を収集し、データベースとして公開することが可能になる。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本語学習者に対する教育において、授業の効率化を目的に多様な遠隔授業を試み、その長所、短所及び特性の把握、分析を通して教育現場での直接的な応用を研究するものである。具体的な目的は、以下の3項目を達成することである。

- (1) 教授者が簡単に費用をかけずに遠隔授業ができる多様な授業方法を実践、分析し情報を提供することでインターネットに専門的な知識が乏しい教授者及び学習者であっても多様な授業に応用することができる授業の方案を樹立する。
- (2) ネイティブ教授者と非ネイティブ教授者とのインターネット画像授業を利用したチームティーチング方式による授業実践を通じて日本語学習者に対するネイティブ教授者による生きた日本語教育の方法を構築する。
- (3) 多様な授業実践を通じて媒介語を使用した遠隔チームティーチングの特徴を分析、研究する。

## 3. 研究の方法

近年のインターネット環境の発達に伴い IT 技術を応用した授業形態は日本語教育分野においても実践されてきている。本研究では、授業方式の効率化のための研究の一環として以下の(1)～(5)の形態の授業が行われた。

- (1) 韓国内の教授者による対面授業及び日本国内の教授者による画像チャット機能及び SNS を利用した遠隔画像音声授業を通じたチームティーチング講義
- (2) 韓国内の教授者による対面授業時に日本国内の教授者が無線 LAN 機能のノート・パソコンを利用してウェブカメラを通して授業に参加する対面授業参加型チームティーチング講義
- (3) 画像音声チャット機能を利用した韓国人教授者及び日本人ネイティブ教授者による SNS 上のチームティーチング講義
- (4) 日本国内の教授者によるウェブカメラを利用した教室参加型授業
- (5) SNS 上で行う自作ビデオ講義を通じた遠隔授業

(1)～(5)の授業形態の中で特に(2)のイン

ターネットを通じたネイティブ教授者参加型のチームティーチング授業方式は、新しい授業形態であり、ネイティブ教授者の確保が困難な遠隔地においては、有用な方式であると考えられる。そこで、(1)～(5)の授業方式の長所、短所及び特性を分析するとともに、遠隔チームティーチング方式における効率的な指導方法について実践的な授業に基づき研究を行った。

#### 4. 研究成果

このように多様な形態で遠隔授業を試みた結果、学習者は対面授業 > 画像音声チャット授業 > SNS 授業の順で好むという傾向が分かった。また、画像音声チャット機能を利用した授業を通じて空間を超越した双方向型の授業が可能であるとともに、学習者間のリアルタイム討論、質疑応答等にも効率的であった。それ以外にも学習者の授業に対するモチベーション及び授業への参加率、授業の長所、短所等に対する多様な実践及び結果を得ることができた。さらに、学習者の作文をオンライン上で提出させることによりデータベース化が図られ、学習者が容易に他の学習者の学習方式や添削作文を閲覧し参考にすることが可能になった。

一方、授業の運営に関する多くの問題点も浮かび上がった。特筆する点としては、遠隔教育の集中度が対面授業と比較し相当の差がある点、また、インターネット環境上の問題、学習者と教授者のインターネットリテラシーの欠如による実際の授業活用時に多大な時間的損失が生じる点等に対する問題があった。

さらに、新たな形態であるインターネットを通じたネイティブ教授者参加型チームティーチング授業方式においては、以下のような特徴が見られた。

- (1) ネイティブ教授者が学習者全体に対して一斉に指導を行う形式よりも非ネイティブ教授者が主導して学習者との仲介を媒介語を用いて行い、授業を進行していく形式の方が授業の進行の面で効果的であった。
- (2) 遠隔授業内で、学習者がネイティブ教授者との対話を試みる形式を初級レベルから授業内に取り入れることにより、授業の活性化が図れた。
- (3) 初級レベルより上級レベルの学習者ほどインタラクティブな遠隔協働授業を好む傾向が強かった。
- (4) チームティーチング授業におけるネイティブ教授者の役割としては、「会話」「発音・アクセント」「日本文化紹介」での必要性が高かった。
- (5) 日本語の四技能の中で「話す」「聞く」「書

く」においてネイティブ教授者の活用度が高いのと同様、遠隔協働授業でも「読解」授業より「会話」や「作文」授業においてネイティブ教授者の利点が活かされた。

このように、多様な形態で行われた授業において、インタラクティブな形式で実施された遠隔チームティーチング授業は、今後様々な授業への応用方法が考えられる。特に、限定された空間を脱して空間を移動しながら進行する方式や遠隔地から複数のネイティブ教授者が接続する方式等が可能となり、学習者は現地にいながらにして母語話者教授者が参加する画像授業を享受することが可能となる。このように授業の効率化を図るための遠隔授業方法の構築を目的に、今後も遠隔協働授業に関する調査・研究を推進していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 大塚薫・朴敏瑛・李暲洙、画像参加型日本語講読チーム・ティーチング授業における日本語母語話者教授者の役割、日本学報、査読有、第 86 輯、2011、pp.99-107
- ② 大塚薫・李暲洙・金才鉉、高等教育における遠隔チーム・ティーチング授業実践研究—インターネット画像通話プログラムを利用した日本語母語話者教授者参加型授業—、日本語教育、査読有、第 53 輯、2010、pp.93-103
- ③ 大塚薫、画像参加型日本語講読チーム・ティーチング授業における日本語母語話者教授者の役割、韓国日本語学会第 21 回国際学術発表会論文集、査読無、2010、pp.127-131
- ④ 大塚薫・李暲洙・金才鉉、上級日本語学習者に対する遠隔日本語作文授業方法の構築—インターネットテレビ会議システムを利用した論理的叙述法教育を通して—、韓国での日本学、日本での韓国学研究の現況及び展望、査読無、2009、pp.150-153
- ⑤ 大塚薫・李暲洙・金才鉉、遠隔チーム・ティーチング授業実践—高等教育における日本語母語話者教授者参加型画像授業—、日語教育、査読有、第 45 輯、2008、pp.83-97
- ⑥ 大塚薫・金才鉉、日本語母語話者教授者参加型遠隔チーム・ティーチング授業の試み、メディア教育研究、査読有、Vol.5 No.1、2008、pp.115-121  
<http://www.code.ouj.ac.jp/wp-content>

/uploads/No.9-14kenkyukaihatsu02.pdf  
#search='日本語母語話者教授者参加型  
遠隔ティーム・ティーチング授業の試み'

〔学会発表〕(計4件)

- ① 大塚薫・李暎洙・金才鉉、高等教育における遠隔ティーム・ティーチング授業実践研究、2010世界日本語教育大会、2010年8月1日、台湾国立政治大学(台湾)
- ② 大塚薫、画像参加型日本語講読ティーム・ティーチング授業における日本語母語話者教授者の役割、韓国日本語学会第21回国際学術発表会、2010年3月20日、誠信女子大学校(韓国)
- ③ 大塚薫・李暎洙・金才鉉、上級日本語学習者に対する遠隔日本語作文授業方法の構築—インターネットテレビ会議システムを利用した論理的叙述法教育を通して—、日本学聯合会合同学術大会、2009年7月3日、群山大学校(韓国)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大塚 薫 (OTSUKA KAORU)  
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授  
研究者番号：30372733

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者 なし

### (4) 研究協力者

李 暎洙 (LEE KYUNG-SOO)  
韓国放送通信大学校・人文学部日文学科・教授

朴 敏瑛 (PARK MIN-YOUNG)  
韓国外国語大学校・外国語学部日本語日本文学科・副教授

金 才鉉 (KIM JAE-HYUN)  
高知県立高知北高等学校・講師